

招待席

樋口 一葉

ひぐち いちよう 小説家。1872.5.2(旧 3.25) - 1896.11.23 東京府内幸町に生まれる。抜群の才能で近代に先駆け 25 歳で逝った閨秀作家。掲載作は、名作「たけくらべ」と時期重なる明治 28 年 (1895)5 月刊の「太陽」第一巻第五号に、掲載された。題名の「ゆく雲」は、心変わり、恋のはかなさを象徴しているようだ。今回は、『ちくま日本文学全集「樋口一葉」』より、収録。

ゆく雲

上

酒折の宮、山梨の岡、塩山、裂石、さし手の名も都人の耳に聞きなれぬは、小仏さき子の難処を越して猿橋のながれに眩めき、鶴瀬、駒飼見るほどの里もなきに、勝沼の町とても東京にての場末ぞかし、甲府はさすがに大廈高楼、躑躅が崎の城跡など見る処のありとは言えど、汽車の便りよき頃になれば知らず、こと更の馬車腕車に一昼夜をゆられて、いざ恵林寺の桜見にという人はあるまじ、故郷なればこそ年々の夏休みにも、人は箱根伊香保ともよおし立つる中を、我れのみ一人あし曳の山の甲斐に峰のしら雲あとを消すことさりとはいは是非もなけれど、今歳この度みやこを離れて八王子に足をむける事これまでに覚えなき愁らさなり。

養父清左衛門、去歳よりどこそこからだに申分ありて寝つきつとの由は聞きしが、常日頃すこやかの人なれば、さしての事はあるまじと医者指図などを申しやりて、この身は雲井の鳥の羽がい自由なる書生の境界に今しばしは遊ばるる心なりしを、先きの日故郷よりの便りに曰く、大旦那さまことその後の容体さしたる事はござなく候えども、次第に短気のまさりて我意つよく、これ一つは年の故にはござ候わんなれど、ずいぶんあたりの者ご機げんの取りにくく、大心配をいたすよし、私など古狸の身なればとかくつくろいて一日二日と過し候えども、筋のなきわからずやを仰せいだされ、足もとから鳥の立つようにお急ぎたてなざるには大閉口に候、この中よりしきりにあなた様をお手もとへお呼び寄せなさりたく、一日も早く家督相続あそばさせ、楽隠居なされたきおのぞみのよし、これ然るべき事とご親類一同のご決義、私は初手からあなた様を東京へお出し申すは気に喰わぬほどにて、申しては失礼なれどいささかの学問などどうでもよい事、赤尾の彦が息子のように気がいになって帰ったも見ており候えば、もともと利発のあなた様にその気づかいはあるまじきなれど、放蕩ものにもおなりなされては取返しがつき申さず、今の分にて嬢さまとご祝言、ご家督引つぎもはや早きお歳にはあるまじくと大賛成に候、さだめしきだめしその地には遊しかけのご用事もござ候わんそれらを然るべく

お取まとめ、飛鳥もあとを濁すな候え、大藤の大尽が息子と聞きしに野沢の桂次は了簡の清くない奴、どこやらの割前を人に背負せて逃げおったなどとういう噂があとあとに残らぬよう、郵便為替にて証書面のとおりに送り申候えども、足りずば上杉さまにてお立かえを願ひ、諸事清潔にしてお帰りなさるべく、金故に恥じをお搔きなされては金庫の番をいたす我等が申わけなく候、前申せし通り短気の大旦那さましきりに待ちこがれて大じれにござ候え、その地のお片つけす次第、一日もはやくと申納候、六蔵という通い番頭の筆にてこのようの迎い状いやとは言いがたし。

家に生抜きの我れ実子にてもあらば、かかる迎えのよしや十度十五たび来たらんとも、おもい立ちての修業なればひと廉の学問を研かぬほどは不孝の罪ゆるし給えとでもいいやりて、その我ままの徹らぬ事もあるまじきなれど、愁らきは養子の身分と桂次はつくづく他人の自由を羨みて、これからの行く末をも鎖りにつながれたるようにならぬ。

七つのとしより実家の貧を救われて、生れしままなれば素跣足の尻きり半纏に田圃へ弁当の持はこびなど、松のひでを燈火にかえて草鞋うちながら馬士歌でもうたうべかりし身を、目鼻だちのどこやらが水子にて亡せたる総領によく似たりとて、今はなき人なる地主の内儀に可愛がられ、はじめはお大尽の旦那と尊びし人を、父上と呼ぶようになりしはその身の幸福なれども、幸福ならぬ事おのずからその中にもあり、お作という娘の桂次よりは六つの年少にて十七ばかりになる無地の田舎娘をば、どうでも妻にもたねば納まらず国を出るまではさまで不運の縁とも思わざりしが、今日この頃は送りこしたる写真をさえ見るに物うく、これを妻に持ちて山梨の東郡に蟄伏する身かと思えば人のうらやむ造酒家の大身上は物のかずならず、よしや家督をうけつぎてからが親類縁者の干渉きびしければ、我が思う事に一銭の融通も叶うまじく、いわば宝の蔵の番人にて終るべき身の、気に入らぬ妻までとはいよいよの重荷なり、うき世に義理という柵みのなくば、蔵を持ぬしに返し長途の重荷を人にゆずりて、我れはこの東京を十年も二十年も今すこしも離れがたき思ひ、そはなにゆえと問う人のあらば切りぬけ立派に言いわけの口上もあらんなれど、つくろいなき正の処こもとにただ一人すててかえる事のおしくおしく、別れては顔も見がたき後を思えば、今より胸の中もやくやとして自ら気もふさぐべき種なり。

桂次が今おるここもとは養家の縁に引かれて伯父伯母という間がらなり、はじめてこの家へ来たりしは十八の春、田舎縞の着物に肩縫あげおかしと笑われ、八つ口をふさぎて大人の姿にこしらえられしより二十二の今日までに、下宿屋住居を半分と見つもりても出入り三年はたしかに世話をうけ、伯父の勝義が性質の気むずかしいところから、無敵にわけのわからぬ強情の加減、ただただ女房にばかり手やわらかなる可笑しさも呑込めば、伯母なる人が口先ばかりの利口にて誰れにつきても根からさっぱり親切気のなき、我欲の目当てが明らかに見えねば笑いかけた口もとまで結んで見せる現金の様子まで、度々の経験に大方は会得のつきて、この家にあらんとには金づかい奇麗に損をかけず、表むきはどこまでも田舎書生の厄介者が舞いこみてお世話に相成るといふこしらえでなくては第一に伯母御前がご機嫌むずかし、上杉という苗字をばよいことにして大名の分家と利かせる見得ぼうの上なし、下女には奥様といわせ、着物は裾のながいを引いて、用をすれば肩がはるという、三十円どりの会社員の妻がこの形粧にて繰廻しゆく家の中おもえばこの女が小利口の才覚ひとつにて、良人が箔の光って見ゆるやら知ら

ねども、失敬なは野沢桂次という見事立派の名前ある男を、かげに廻りては家の書生がと安々こなされて、お玄関番同様にいわれる事馬鹿らしさの頂上なれば、これのみにても寄りつかれぬ価値はたしかなるに、しかもこの家の立はなれにくく、心わるきまま下宿屋あるきと思案をさだめても二週間と訪問を絶ちがたきはあやし。

十年ばかり前にうせたる先妻の腹にぬいと呼ばれて、今の奥様には継なる娘あり、桂次がはじめて見し時は十四か三か、唐人髷に赤き切れかけて、姿はおさなびたれども母のちがう子はどこやらおとなしく見ゆるものと気の毒に思いしは、我れも他人の手にて育ちし同情を持てばなり、何事も母親に気をおかね、父にまで遠慮がちなれば自ずから詞かずも多からず、一目に見わたしたところでは柔和しい温順の娘というばかり、格別利発ともはげしいとも人は思うまじ、父母そろいて家の内に籠り居にても済むべき娘が、人目に立つほど才女など呼ばれるは大方おきやんの飛びあがりの、甘やかされの我ままの、つつしみなき高慢より立つ名なるべく、物にはばかりの心ありて万ひかえ目にと気をつくれれば、十が七に見えて三分の損はあるものと桂次は故郷のお作が上まで思いくらべて、いよいよおぬいが身のいたましく、伯母が高慢がおはつくづく嫌やなれども、あの高慢にあの温順なる身にて事なく仕えんとする気苦労を思いやれば、せめては傍近くに心ぞえをも為し、慰めにも為りてやりたしと、人知らば可笑かるべき自ぼれも手伝いて、おぬいの事といえは我が事のように喜びもし怒りもして過ぎ来つるを、見すてて我れ今故郷にかえらば残れる身の心はそさいかばかりなるべき、あわれなるは継子の身分にして、腑甲斐ないものは養子の我れと、今更のように世の中のあじきなきを思いぬ。

中

ママ母育ちとて誰れもいう事なれど、あるが中にも女の子の大方すなおに生たつは稀なり、少し世間並除け物の緩い子は、底意地はって馬鹿強情など人に嫌わる事この上なし、小利口なるは狡るき性根をやしのうて面かぶりの大変ものに成もあり、しゃんとせし気性ありて人間の質の正直なるは、すね者の部類にまぎれてその身に取れば生涯の損おもうべし、上杉のおぬいと言う娘、桂次がのぼせるだけ容貌も十人なみ少しあがりて、よみ書き十露盤それは小学校にて学びしだけのことは出来て、我が名にちなめる針仕事は袴の仕立までわけなきよし、十歳ばかりの頃までは相応に悪戯もつよく、女にしてはと亡き母親に眉根を寄せさせて、ほころびの小言も十分に聞きしものなり、今の母は父親が上役なりし人の隠し妻とやらお妾とやら、種々曰くにつきし難物のよしなれども、持ねばならぬ義理ありて引うけしにや、それとも父が好みで申受しか、その辺たしかならねど勢力おさおさ女房天下と申ような景色なれば、ママ子たる身のおぬいがこの瀬に立ちて泣くは道理なり、もの言えは睨まれ、笑えば怒られ、気を利かせれば小ざかしと云い、ひかえ目にあれば鈍な子と叱られる、二葉の新芽に雪霜のふりかかりて、これでも延びるかとおお押えるような仕方に、堪えて真直ぐに延びたつ事人間わざには叶うまじ、泣いて泣いて泣き尽くして、訴えたいにも父の心は鉄のように冷えて、ぬる湯一杯たまわらん

情もなきに、まして他人の誰れにか慨つべき、月の十日に母さまがおん墓まいりを谷中の寺に
 楽しみて、しきみ線香それぞれの供え物もまだ終らぬに、母さま母さま私を引取って下されと
 石塔に抱きつきて遠慮なき熱涙、苔のしたにて聞かば石もゆるぐべし、井戸がわに手を掛て水
 をのぞきし事三四度に及びしが、つくづく思えば無情とても父様は真実のなるに、我れはかな
 くなりてよからぬ名を人の耳に伝えれば、残れる恥は誰が上ならず、もったいなき身の覚悟と
 心の中に侘言して、どうでも死なれぬ世に生中目を明きて過ぎんとすれば、人並のうい事つら
 い事、さりとはこの身に堪えがたし、一生五十年めくらになりて終らば事なからんとそれより
 は一筋に母様のご機嫌、父が気に入るよう一切の身をないものにして勤むれば家の内なみ風お
 こらずして、軒ばの松に鶴が来て巢をくいはせぬか、これを世間の目に何と見るらん、母御は
 世辞上手にて人を外らさぬ甘さあれば、身をないものにして闇をたどる娘よりも、一枚あがりて、
 評判わるからぬやら。

お縫とてもまだ年わかなる身の桂次が親切はうれしからぬにあらず、親にすら捨てられたら
 んような我がごときものを、心にかけて可愛がりて下さるは辱けなき事と思えども、桂次が思
 いやりに比べては遥かに落つきて冷やかなるものなり、おぬいさん我れがいよいよ帰国したと
 なったならば、あなたは何と思うて下さろう、朝夕の手がはぶけて、厄介が減って、楽になっ
 たとお喜びなさろうか、それとも折ふしはあの話し好きの饒舌のさわがしい人が居なくなっ
 たで、少しは淋しい位に思い出して下さろうか、まあ何と思うてお出なさるとこんな事を問いか
 けるに、おっしゃるまでもなく、どんなに家中が淋しくなりましょう、東京にお出あそばして
 さえ、ひと月も下宿に出て入らっしゃる頃は日曜が待どおで、朝の戸を明けるとやがてお足お
 とが聞えはせぬかと存じまするものを、お国へお帰りになつては容易にご出京もあそばすまじ
 ければ、またどれほどのお別れになりまするやら、それでも鉄道が通うようになりましてら度々
 お出あそばして下さりましょうか、そうならば嬉しけれどと言う、我れとても行きたくてゆく
 故郷でなければ、ここに居られるものなら帰るではなく、出て来られる都合ならばまた今まで
 のようにお世話になりに来まする、なるべくはちょっとたち帰りにすぐも出京したきものと軽
 くいえば、それでもあなたは一家のご主人さまになりて采配をおとりなさらずは叶うまじ、今
 までのようなお楽のご身分ではいらっしゃらぬはずと押えられて、されば誠に大難に逢いたる
 身と思しめせ。

我が養家は太藤村の中萩原とて、見わたす限りは天目山、大菩薩峠の山々峰々垣をつくりて、
 西南にそびゆる白妙の富士の嶺は、おしみて面かげを示めさねども冬の雪おろしは遠慮なく身
 をきる寒さ、魚といいては甲府まで五里の道を取りにやりて、ようよう鱻の刺身が口に入る位、
 あなたはご存じなけれどお親父さんに聞て見給え、それはずいぶん不便利にて不潔にて、東京
 より帰る夏分などは我まんのなりがたき事もあり、そんな処に我れは括られて、面白くも
 ない仕事に追われて、逢いたい人には逢われず、見たい土地はふみ難く、兀々として月日を送
 らねばならぬかと思に、気のふさぐも道理とせめてはあなたでもあわれんでくれ給え、可愛そ
 うなものではなきかと言うに、あなたはそうおっしゃれど母などはおうらやましきご身分と申
 ておりまする。

何がこんな身分うらやましい事か、ここで我れが幸福というを考えれば、帰国するに先だち

てお作が頓死するというようなことになれば、一人娘のことゆえ父親おどろいてしばしは家督沙汰やめになるべく、然るうちに少々なりともやかましき財産などのあれば、みすみす他人なる我れに引わたす事をしくもなるべく、または縁者の中なる欲ばりどもただにはあらで運動することたしかなり、その暁に何かいささか仕損ないでもこしらゆれば我れは首尾よく離縁になりて、一木立の野中の杉ともならば、それよりは我が自由にその時に幸福という詞を与え給えと笑うに、おぬい悩れてあなたはそのような事正気でおっしゃりますか、平常はやさしい方と存じましたに、お作様に頓死しろとは陰ながらの嘘にしろあんまりでござります、お可愛想なことをと少し涙ぐんでお作をかばうに、それはあなたが当人を見ぬゆえ可愛想とも思うか知らねど、お作よりは我れの方を憐れんでくれていいはず、目に見えぬ縄につながれて引かれてゆくような我れをば、あなたは真のところ何とも思うてくれねば、勝手にしろという風で我れの事としては少しも察してくれる様子が見えぬ、今も今居なくなったら淋しかろうとお言いなされたはほんの口先の世辞で、あんな者は早く出てゆけと箒に塩花が落ちならんも知らず、いい気になってお邪魔になって、長居をしてお世話さまになったは、申訳がありませぬ、いやでならぬ田舎へは帰らねばならず、情のあろうと思うあなたがそのように見すてて下されば、いよいよ世の中は面白くないの頂上、勝手にやってみましょうとわざとすねて、むっと顔をして見せるに、野沢さんは本当にどうか遊していらっしゃる、何がお気に障りましたのとお縫はうつくしい眉に皺を寄せて心の解しかねる体に、それはもちろん正気の人目からは気ちがいと見えるはず、自分ながら少し狂っていると思う位なれど、気ちがいだと種なしに間違うものでもなく、いろいろの事が畳まって頭脳の中がもつれてしまうから起る事、我れは気違いか熱病か知らねども正気のあなたなどがとてもおもしろいも寄らぬ事を考えて、人しれず泣きつ笑いつ、どこやらの人が子供の時うつした写真だというあどけないのを貰って、それを明けくれに出して見て、面と向っては言われぬ事を並べてみたり、机の引出しへ叮嚀にしまってみたり、うわ言をいったり夢を見たり、こんな事で一生を送れば人は定めし大白痴と思うなるべく、そのような馬鹿になってまで思う心が通じず、なき縁ならばせめては優しい詞でもかけて、成仏するようにしてくれたらよさそうの事を、しらぬ顔をして情ない事を言って、お出がなくば淋しかろう位のお言葉は酷いではなきか、正気のアナタは何と思うか知らぬが、狂気の身にしてみるといぶん気づよいものと恨まれる、女というものはもう少しやさしくても好いはずではないかと立てつづけのひと息に、おぬいは返事もしかねて、私しは何と申してよいやら、不器用なればお返事のしようも分らず、ただただこころぼそくなりますとて身をちぢめて引退くに、桂次拍子ぬけのしていよいよ頭の重たくなりぬ。

上杉の隣家は何宗かのおん梵利さまにて寺内広々と桃桜いろいろ植わたしたれば、こなたの二階より見おろすに雲は棚曳く天上界に似て、腰ごろもの観音さま濡れ仏にておわしますおん肩のあたり膝のあたり、はらはらと花散りこぼれて前に供えし櫛の枝につもれるもおかしく、下ゆく子守りが鉢巻の上え、しばしやどかせ春のゆく衛と舞いくるもみゆ、かすむ夕べの朧月よに人顔ほのぼのと暗くなりて、風少しそう寺内の花をば去歳も一昨年もそのまえの年も、桂次ここに大方は宿を定めて、ぶらぶらあるきに立ならしたる処なれば、今歳この度とりわけて珍らしきさまにもあらぬを、今こん春はとても立かえり踏べき地にあらずと思うに、ここの濡

れ仏さまにも中々の名残おしまれて、夕げ終りての宵々家を出てはおん寺参り殊勝に、観音さまには合唱を申して、我が恋人のゆく末を守り玉えと、お志しのほどいつまでも消えねばよいが。

下

我れのみ一人のぼせて耳鳴りやすべき桂次が熱ははげしけれども、おぬいと言うもの木にて作られたるようの人なれば、まずは上杉の家にやかましき沙汰もおこらず、大藤村にお作が夢ものどかなるべし、四月の十五日帰国に極まりて土産物など折柄日清の戦争画、大勝利の袋もの、ぱちん羽織の紐、白粉かんざし桜香の油、縁類広ければとりどりに香水石鹸の気取りたるも買うめり、おぬいは桂次が未来の妻にと贈りものの中へ薄藤色の襦袢の襟に白ぬきの牡丹花の形あるをやりけるに、これを眺めし時の桂次が顔、気の毒らしかりしと後にて下女の竹が申しき。

桂次がもとへ送りこしたる写真はあれども、秘しがくしに取納めて人には見せぬか、それとも人しらぬ火鉢の灰になり終りしか、桂次ならぬもの知るよしなけれど、さる頃はがきにて廻用を申こしたる文面は男の通りにて名書きも六蔵の分なりしかど、手跡大分あがりて見よげになりしと父親の自まんより、娘に書かせたる事論なしとここの内儀が人の悪き目にて睨みぬ、手跡によりて人の顔つきを思いやるは、名を聞いて人の善悪を判断するようなもの、当代の能書に業平さまならぬもおわしますぞかし、されども心用い一つにて悪筆なりとも見よげのしたため方はあるべきと、達者めかして筋もなき走り書きに人よみがたき文字ならば詮なし、お作の手はいかなりしか知らねど、ここの内儀が目の前にうかびたる形は、横幅ひろく長つまりし顔に、目鼻だちはまずくもあるまじけれど、鬢うすくして首筋くつきりとせず、胴よりは足の長い女とおぼゆると言う、すて筆ながく引いて見ともなかりしか可笑し、桂次は東京に見てさえ醜るい方ではないに、大藤村の光る君帰郷という事になれば、機場の女が白粉のぬりかた思われるとここにての取沙汰、容貌のわるい妻を持つぐらい我慢もなるはず、水呑みの小作が子として一足飛のお大尽なればと、やがては実家をさえ洗われて、人の口さがなし伯父伯母一つになって嘲るような口調を、桂次が耳に入らぬこそよけれ、一人気の毒と思うはお縫なり。

荷物は通運便にて先へたせれば残るは身一つに軽々しき桂次、今日も明日もと友達のもとを馳せめぐりて何やらん用事はあるものなり、僅かなる人目の暇を求めてお縫が袂をひかえ、我れは君に厭われて別るるなれども夢いささか恨む事をばなすまじ、君はおのずから君の本地ありてその島田をば丸曲にゆいかえる折のきたるべく、うつくしき乳房を可愛き人に含まする時もあるべし、我れはただ君の身の幸福なれかし、すこやかなれかしと祈りてこの長き世をばつく尽さんにはずいぶんとも親孝行にてあられよ、母御前の意地わるに逆らうようの事は君としてなきに相違なけれどもこれ第一に心がけ給え、言うことは多し、思うことは多し、我れは世を終るまで君のもとへ文の便りをたたざるべければ、君よりも十通に一度の返事を与え給え、睡りがたき秋の夜は胸に抱いてまぼろしの面影をも見んと、このようの数々を並べて男なきに涙のこぼれるに、ふり仰向てはんけちに顔を拭うさま、心よわげなれど誰れもこんなものなるべし、

今から帰るといふ故郷の事養家のこと、我身の事お作の事みなから忘れて世はお縫ひとりのように思われるも闇なり、この時こんな場合にはかなき女心の引入られて、一生消えぬかなしき影を胸にきざむ人もあり、岩木のようなお縫なれば何と思ひしかは知らねども、涙ほろほろこぼれてひと言もなし。

春の夜の夢のうき橋、と絶えする横ぐもの空に東京を思い立ちて、道よりもあれば新宿までは腕車がよしといふ、八王子までは汽車の中、おりればやがて馬車にゆられて、小仏の峠もほどなく越ゆれば、上野原、つる川、野田尻、犬目、鳥沢も過ぐれば猿はし近くにその夜は宿るべし、巴峽のさげびは聞えぬまでも、笛吹川の響きに夢むすび憂く、これにも腸はたたるべき声あり、勝沼よりの端書一度とどきて四日目にぞ七里の消印ある封状二つ、一つはお縫へ向けてこれは長かりし、桂次はかくて大藤村の人になりぬ。

世にたのまれぬを男心といふ、それよ秋の空の夕日にわかにかきくもりて、傘なき野道に横しぶきの難義さ、出あいしものはみなそのように申せどもこれみな時のはずみぞかし、波こえよとて末の松山ちぎれるもなく、男領域ならぬ身の空涙こぼして何になるべきや、昨日あわれと見しは昨日のあわれ、今日の我が身に為す業しげければ、忘るとなしに忘れて一生は夢のごとし、露の世といえはほろりとせしもの、はかないの上なしなり、思えば男は結髪いいなづけの妻ある身、いやとても応とても浮世うきよの義理をおもい断つほどのことこの人この身にして叶うべしや、事なく高砂たかさごをうたい納むれば、すなわち新らしき一對の夫婦出来あがりて、やがては父とも言わるべき身なり、諸縁しよえんこれより引かれて断ちがたき絆次第ほだしにふゆれば、一人一箇いちにいつこの野沢桂次ならず、運よくは万の身代十万のぼに延して山梨県のぼの多額納税めいと銘うたんも斗りがたけれど、契りし詞ことばはあとの湊みなとに残して、舟は流れにしたがい人は世に引かれて、遠ざかりゆくこと千里、二千里、一万里、ここ三十里へだの隔てなれども心かよわずは八重がすみ外山とやまの峰みねをかくすに似たり、花ちりて青葉の頃までにお縫が手もとに文三通ふみ、こと細かなりけるよし、五月雨軒さみだれのきばに晴れまなく人恋しき折ふし、かなたよりも数々おも思い出いでの詞うれしく見つる、それも過ぎては月一二度の便り、はじめは三四度もありけるを後には一度の月あるを恨みしが、秋蚕あきごのはきたてとかいえるに懸りしより、二月に一度、三月に一度、今のちの間に半年目、一年目、年始の状しよちゆうみまいと暑中見舞つぎあいの交際になりて、文言もんごんうるさしとならば端書にても事は足るべし、あわれ可笑おかしと軒おばの桜くる年も笑うて、隣となりの寺の観音様おん手を膝にゆうわに柔和そうのおん相えこれも笑めるがごとく、若いさかりの熱ほおというものにあわれみ給えば、ここなる冷やかのお縫も笑くぼを頬ほおにうかべて世に立つ事はならぬか、相かわらず父様ととさまのご機嫌、母の気をはかりて、我身をないものにして上杉家あんのんの安穩あんをはかりぬれど、ほころびが切れてはむずかし。

Higuchi Ichiyo

日本ペンクラブ 電子文藝館編輯室

This page was created on Sep 18, 2008